

R e : ゼロから始める魔女教会談

傍観者×

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如コンビニ帰りに異世界に召喚された引きこもり学生の菜月昴。その昴を3章くらいから苦しめてきた魔女教大罪司教が一度に集まり近況報告? 的なことをしたらどうなるかという話です。幼女使いナツキスバルに倒された大罪司教怠惰担当ペテルギウス・ロマネコンティはまだ生きています。ただ大罪司教同士が話している姿がほとんど描写がないため筆者の創造になります。そういうのが苦手な方は回れ右でお願いします。

魔女教の中核の人物パンドラが大罪司教全員に招集をかけたことから物語が始まります。

目次

魔女教会談	1
シリウスちゃんはヤンデレ系乙女（おつおんな）	5
史上最低の女子会	9
狂人とクズの本懐	22
空腹の逢瀬	33

魔女教会談

1話

魔女教徒

その名前を聞くとあるものは関わりを避けようとし、あるものは顔をしかめ、またあるものは怒りに身を焦がす。このルグニカにおいて、いやこの世界において魔女教徒と聞いてよいイメージを持つものは1人もいない。

曰く 嫉妬の魔女サテラを崇拜し、サテラ復活の為ならどのような非人道的なことでもする狂気の集団。

曰く 嫉妬の魔女と種族が同じのハーフエルフを憎み、ハーフエルフやそれ以外のすべての生き物を殺すことに何の躊躇もない集団。

曰く 嫉妬の魔女サテラ以外の魔女を認めず、サテラ以外の魔女の遺産が出てきたら、回収の過程でその都市を滅ぼすことすらいとわな
い集団。

曰く 剣聖にすら匹敵するほどの実力を持つ集団

その魔女教なかでも大罪司教と言われている魔女教の幹部は人災の象徴ともいわれ、大罪司教が1人いるだけで三大魔獣と同等もしくはそれ以上の被害をもたらすとされている存在。

それほどの存在でありながら大罪司教の情報はいまのところ2人分しかない。

1人は怠惰担当。魔女教の襲撃の半分以上に加担していると言われている。

もう1人は強欲担当。怠惰に比べると活動頻度は全然少ないが、ルグニカ王国の南にあるヴォラキア帝国を英雄八つ腕のクルガンを含めてたった1人で攻め落としたほどの力の持ち主。

その魔女教の大罪司教全員が勢ぞろいしているこの空間は異様ともいえる。

場所は嫉妬の魔女サテラが封印されている極東の大瀑布に最も近い場所。

アウグリア砂丘の中にある周りを見渡しても他の家が一切見えなような場所。

その中で一番に口を開いたのは一見何の変哲もない人物だった。

細身の体つきに長くも短くもない白髪のに普通顔付き、街中で遭遇しても10秒程で忘れそうないかにも汎用な見た目の男だった。

「それでパンドラ様？僕とそれ以外の司教を呼んで何の用かな？もし大した用事もないのに呼んだっていうならそれは僕が花嫁たちと一緒に過ごす安定した時間を奪う行為、強いては僕の数少ない権利の侵害になるんだけどそこをどう理解してる？」

魔女教大罪司教強欲担当 レグルス・コルニアスの恐喝ともとれる発言に特に気分を害した様子もなく、パンドラと呼ばれる女は笑みを崩さずに答えた。

「はい。実は皆さんに集まってもらったのは私の持っている福音書の原書にもうすぐ大罪司教が欠けるといふ記述が浮かんでいたのを付けてほしいと思ひまして…」

「なんと、福音の言葉は魔女の言葉。魔女の言葉に答えてこそその愛、愛、愛愛愛愛愛愛愛いいいいいいいい 魔女の寵愛に報いなければあ」

パンドラの言葉をさえぎって言葉を発したのは病的なまでにやせ

細り、両手の指には生々しい噛み傷がある緑の髪の男

大罪司教怠惰担当ペテルギウス・ロマネコンティだった。

ペテルギウスの狂気ともとれる発言に顔をしかめたのはレグルスだった。

「ねえ、今さあ僕がパンドラ様に集まった理由を聞いていたわけじゃない。そこに横やりを入れてくるっていうのはちよつと違うんじゃないかな？それって僕のことなんかとるに足りない矮小な存在だって間接的に言ってるってことだよな？多くを望まない無欲で完結された存在である僕だけど、さすがに誰かの話を聞く権利すら無視されるのは納得できないね。挙句に僕は君と同じ大罪司教なんだけど？君の頭がおかしいのも魔女に盲目的で依存的な愛を抱いてるのも知っているけど、僕の権利を侵害していい理由にはならないよね？」

「私の魔女への愛を冒頭しますか？アア： 脳が震えるう…」

レグルスが地面を蹴り防衛不可能の攻撃を加えようとし、ペテルギウスが見えざる手で応戦しようとした。

両者の間に一触即発の空気が流れたその時

「ペテルギウス・ロマネコンティは私の発言をさえぎらなかつた。」

パンドラがそうつぶやいた。その時両者は何事もなかったかのようにならなっていた。

そしてパンドラはレグルスを背後から襲おうとしていた女に声をかけた。

「これでレグルスとペテルギウスが争う理由はなくなりました。だからあなたも奇襲なんてして無駄に争いを生む必要なんてないので。シリウス」

パンドラが声をかけたシリウスはまさに魔女教大罪司教憤怒担当にふさわしい憤怒の表情を浮かべていた。

シリウスちゃんはヤンデレ系乙女（おつおんな）

憤怒の表情を浮かべるシリウスを見ながらパンドラは思った。

魔女の祠でサテラの封印を解くためにもあの英雄の坊やラインハルトを必ず殺す必要がある。

そのラインハルトを殺すにも戦力の低下は避けたいからこうして集めたんだけどなかなかうまくいかないわね

まあ福音書に大罪司教に選ばれる奴なんて元から人格や性格なんてとうに破綻してる場合が多いから仕方ないことね…

むしろまともな思考してる人なんて魔女教にはいないわ。

それこそ魔女教の口伝で並行世界にあると伝えられているアクシズ教にも匹敵する異常度だと私は思ってるわ。

5

さて思考が脱線してしまったね。

シリウスの憤怒をどうやって収めようかしら…

私の真実の言霊は強い意志を言霊にのせることで真実を捻じ曲げることが出来る。

しかし、シリウスの場合ペテルギウスへの盲目的な愛が原動力で魔女教の活動をしているようなものだから

私の権能で憤怒を捻じ曲げたらそれはシリウスの生きる力、生きる意義を奪い、最悪この場で自害してしまう可能性がある。

戦力低下を避けるためにこうして無理にでも集まってもらったのに今ここでシリウスが自害すれば集まった意味がなくなる。

かといってこのままレグルスに襲い掛かれば間違いなく殺される。

レグルスは行動や言動はアレだが権能”獅子の心臓”により自身の時間を停止することができる。

それにより疑似的な無敵を作り出すことに成功し、歴代の大罪司教の中でも最強の部類に入るでしょう。

シリウスの権能”体感覚の共鳴”も影響力や範囲は強いんだけど獅子の心臓とは相性が悪いわね。

「シリウス？何をしているのデス」

パンドラがシリウスをどうしようか悩んでいるときにペテルギウスが骸骨のようにやせ細った顔をギョツとこちらにむけ、話しかけてきた。

「… ペテルギウス /」

シリウスは愛しのペテルギウスに突然名前を呼ばれて、ビツクリし、やや顔を赤らめて返事をした。

りき、それならその心には常に嬉樂の感情であふれているべきですね。」

その二人のやりとりを冷ややかな目で見つめていたのは全身を漆黒で覆われたドラゴンの姿をしていた魔女教大罪司教色欲担当カペラ・エメラダ・ルグニカその人だった。

そしてもう一人の大罪司教暴食担当ライ・バテンカイトスは我関せずでひたすら飯を平らげていた。

史上最低の女子会

パンドラが魔女教会談を始める少し前にさかのぼり・・・

「今日も有意義な愛の実験ができたわ。」

と魔女教大罪司教色欲担当カペラ・エメラダ・ルグニカは凶悪な笑みを浮かべていた。

カペラの言う愛の実験とは普通の人が見たら嫌悪するどころか吐き気を催すレベルの人間の尊厳を踏みにじる行為だった。

馬鹿な男とクズ肉を愛し合わせ、その後お互いの両親を殺させそれを目撃させる。

それでも犯せるのかそれとも殺すのかクズ肉共がどういう選択するのか楽しみで仕方ねーです。

家族を殺された憤怒の情がが勝ち、愛しているものを殺すのか、性欲が勝ちいろんな汁をまき散らしながらやっちゃうのか楽しみだっ

たのです。

結果はまあワタクシが予想してた通り性欲が勝っちゃったです。

それにしても男の

「両親を殺したのは許せないし、君は一生その罪を背負っていくんだ。もちろん僕も君の両親を殺してしまったことを一生後悔する。しかし、それでも僕は君のことを愛しているんだ。結婚しよう ミツシエル。お互いの家族はもういないけど僕らが家族になって悲しみを癒そう。」

には最高に笑わせてもらったです。

ぎやはははははっ！　クズクズクズクズ肉が　愛なんて口にして結局やりたいただけじゃねえか。どれだけ愛の言葉を囁こうが愛を表現しようが最終的にはやるんだろうが。それを上っ面だけの愛などという言葉で表現して、いい子ぶってエロいことなんて興味ありませんみたいな顔しあがってよ。そのくせ頭の中じや常にエロイこと考えてるくせによ。そういう上っ面だけの愛を囁いてるやつを見るのがワタクシは一番腹が立つんだ。だけどそいつら上っ面かなぐり捨て夢中でやるのを見るのが一番好きなんです。どれだけ上っ面の言葉を並べようと人間の本性である屑な部分も、愛は性欲を満たすための便利な言葉に過ぎないということも理解できちまうんです

よ。これでワタクシも人間の理解を一步深めることができたんだと実感できます。

他にも人間はいつからいつまで性欲を感じるのか疑問に思い、5歳以降の男女や60歳以降の男女を裸で部屋に閉じ込めて実験したり、親族同士で交配させたり、同性を好きになるか実験したり、どんなことがあっても君を愛すると誓うよと言っていたカップルの女のほうの姿を豚に男のほうを猿にしてやったら殺し合いをはじめたよ……

あゝ醜い、醜い

でもそんな醜い死んだほうがましな人間のことワタクシはすべて大好きなのです。このワタクシが好いてどんな体にも変身できて、どんな変態的な欲求にも答えてやるです。だからワタクシだけを見る。他のクズ肉を見てもいいけど最終的にワタクシを見る。万人がワタクシを見て、ワタクシに興味を持つようにワタクシの体をその人の最も性欲を刺激する姿にほかのクズ肉を豚や蠅、ゴキブリなど人間が嫌悪する姿に変えてワタクシの価値を上げ上げ上げ上げ上げ、クズ肉の価値を下げ下げ下げ下げ下げワタクシだけを見るようにしてやる。

すべての実験も終わり実験の結果と自身の考えを語っていたカペラだったが扉の前で訝しげな顔をし、

「それでワタクシの愛の研究室に何の用でいやがります？大罪司教さん

あいにくと大罪司教を招いたつもりはないんですがね？ライか？それともシリウスか？」

カペラの問いかけに対して

「カペラさん こんにちは ご機嫌はいかがですか？」

扉を開きながらシリウスは答えた。

「それにしてもよく私だってわかりましたね。まああのライの餓鬼と間違えられたのは不愉快ではありませんが」

「なあゝに簡単な推理だよ。シリウス君

魔女教徒は魔女の残り香を感じることができる。そしてその感じ方によってだいたい魔女の寵愛度がわかる。ワタクシが感じた寵愛度は大罪司教クラスだった。そしてここに来る可能性がある大罪司教は君か暴食のライ君くらいしかないというわけさ」

自己愛の塊のナルシストバカはわざわざこんな花嫁のいそうにな

い、それどころか人がいそうにないところには来ないだろうしね。あの勤勉な狂人君もこんなところで哲学に興じている暇はないだろうしね。パンドラさんはそもそも権能で魔女の残り香でてないですし……」

カペラの推理にシリウスは

ああ〜ペテルギウスって名前かつこいいな〜

ペテルギウス・ロマネコンティと結婚したら私もシリウス・ロマネコンティになるわね〜

それにしてもカペラって敵になると屑みたいな戦術使ってきて本当にうっとしいけど味方だと話し方がユーモアで面白いわね。一応同性だしあのことを話してみましようか……

「あの……」

シリウスが話そうとしたちようどその時に

「それでシリウスはどうしてここにきたんです？」

シリウスが決死の覚悟で話しかけようとしたときにちようどカペラが問いかけてきてシリウスは焦りと緊張で早口になってしまい

「……ウ……を……れば……か？」

シリウスの小さくて早口な言葉にカペラは

「はあ？もう一度言って……いややっぱいいですわ。そもそもワタクシが聞く義理もねえんですし今 愛の実験のまとめと考察、結果を

踏まえての次の実験の準備で忙しいのでさようなら。」

「待つてカペラ。カペラが研究している愛の分野に関係があることなの。私はペテルギウスを10年近く愛しているの。でもペテルギウスが私の愛に少しでも気付いてもらうにはどうすればいいと思います?」

シリウスは顔を真っ赤にしてカペラにそう尋ねた

シリウスの問いかけにカペラは

「そりゃあ やっちまうしかないでしょ? 襲って押し倒してやることやっちやうしかないでしょ」

「・・・つつつ／＼な、なにを言っているんですか／＼」

カペラの葉に布着せぬ言い草にシリウスが顔をリングのように真っ赤にしていた。

「そういう汚らわしい行為ではなくて・・・」

確かにペテルギウスとの愛が成就したらそういうこともするかもしれないけど・・・

まだそういうのは早すぎます・・・

とにかくもっとさりげない感じのアプローチをお願いします。あ、そうだもしカペラが好きの人でできた時にどうやって気を引きますか?」

シリウスの質問にカペラは一瞬あつけからんとしたががすぐに

ん?・・・

突然イライラ?

あ、シリウスの共感覚にワタクシもかかりそうになっていたっつうことですか

このままじゃ面倒くさいことになりそうですね。とりあえずシリウスの気を逸らすとしましょうかね

「シリウス やめるのデス」ニコッ

憤怒に身を焦がしていたシリウスは突然の愛しのペテルギウスの声で正気に戻り

ペテルギウスの笑顔を見て

「ペ、ペ、ペテルギウシユ いらやしてたんでしゅか?／＼
それならそう言ってくだしいよ」

シリウスは噛み噛みになり、それでいて顔がじわじわと紅く染まっているのが自覚できた。

そんなデレデレのシリウスに対し、気持ち悪いほどの笑みを浮かべたペテルギウスは

「クスクスクス シリウスちゃんペテルギウスだと思った?ぎんね
くん ワタクシことカペラ・エメラダ・ルグニカちゃんです。」

突然ペテルギウスは顔の、いや体の輪郭が粘土のようにふにやふ

にやになり金色の髪の子女がいや悪女がドヤ顔で立っていた。

「・・・ ああカペラの変身能力ですか」ガクツ

シリウスはガクツとうなだれていたが

内心で本物のペテルギウスもいつかあんな風に私の側で笑って欲しい と考えていた。

そしてカペラの行動についてシリウスが感じたのは憤怒の情は1割で残りの9割はペテルギウスの笑顔を見せてくれたことへの感謝だった。普段のシリウスなら自分の心を弄ばれて間違いなく憤怒していただろう。しかしペテルギウスの笑顔を見れて心がのぼせてしまったのだろうか。それほどまでにペテルギウスに恋焦がれていた。恋する乙女（笑）は強いのだ

17

「カペラ また話に来てもよいでしょうか？」

「いいですよ。というかなんですか？いきなり改まって今日だって特に約束せずに来たじゃないですか？このシリウスさんは」

シリウスは少し嬉しそうに頬を緩ませていた。

そしてシリウスはカペラと話し相手、否友達になりたいと思った。

「カペラ 私とお友達になってくれませんか？」

シリウスは自然と言葉が出てきた。その直後体から嫌な冷や汗が滴り落ちた。そして、心なしかいつも体に巻き付けている鎖がいつも以上に冷たく感じた

カペラに友達になって欲しいと告げてからどれほどの時間がたっただろう。10秒？1分？体感時間では何時間にも感じられた。

そんなシリウスの緊張とは裏腹にカペラは少し考え、答えた。

「いいですよ。シリウスさんと話しているとなかなか楽しめるので」

シリウスは嬉しかった。久しぶりにできた友達だから。今までは友達が出来ても私が魔女教徒だと知ると恐怖して逃げていったか、利用しようとしてくる連中ばかりだった。もちろん恐怖して逃げたり、利用しようとした人たちは共感覚で騎士を殺させた後に自害させたリペテルギウスの指先に加えたりしましたがね。彼らも魔女教徒のために働いて、死ねて満足しているでしょう。

「ただしこちらからのお願いが1つあります。

いいですか？」

「なんですか？」

シリウスはソワソワしていた。カペラのお願いってなんだろう？余程の事じゃなかったら聞いたあげたいけど、もしペテルギウスを私に下さいとかだったらいくらカペラといえど譲れないし友達も解消になる。それどころかここで殺し合いになってしまいかもしれない。ペテルギウスはカツコイイからもしかしてたらカペラも惚れたのか

な？せつかく友達になりそうだったのに殺しちゃうのは嫌だな・

「もしペテルギウスとシリウスの子どもができたらワタクシに下さ
い。」

「いいわよ」

「別に無理にとは言わな・・・え？ いいの？」

「ええ そんなことでいいなら全然いいわよ。いくらでも上げるわ。」

小さい子どもと言えどカペラ・エメラダ・ルグニカの愛の探求を前
には関係ない。体や心 いや人間としての尊厳を弄ばれるだろう。
普通の親ならまずこんなことは言わないだろう。さすがのカペラも
血の繋がった親子を実験するのは躊躇したのかももう1度聞き返した。

「本当にいいんですか？」

実際に実験の終わったあとにイチヤモンつけられて殺し合いに
なったら面倒だしね・・・

それにシリウスが本気で共感覚を広範囲に張ったらワタクシの実
験も難しくなるしね。

子どもの心配ではなく自分の心配をしていた。

そんなカペラの問いかけにシリウスは

「本当に構いませんよ。そもそも子どもが生まれたらペテルギウスの好意が子どもに向けられるかもしれないじゃないですか。そうなたらせつかくの私の、私だけとペテルギウスになったのに、もう憤怒せずに楽しい感情だけで生きていけると思ったのに、子どものせいで憤怒しなきゃいけないじゃないですか？それに小さい子どもは嫌いなんですよね。共感覚で命令しても理解できない場合が多いし、すぐに憤怒も冷めちゃうから嫌なんですよね」

シリウスの主張にカペラは笑みを浮かべて

「じゃあ契約成立ですね。」

機会があればまた話しましょう。ペテルギウスとシリウスとワタクシの3人が揃う機会があればシリウスの恋の応援させてもらおうですね」

大罪司教同士の子どもには権能が宿るのかどうかも気になっていたんですね。いいサンプルが手に入りそうです。それにうまく利用すれば怠惰や憤怒という手札を手に入れられるかもしれないしな。手札は多いに越したことはないからね。

カペラは愛の研究室でのシリウスとのやりとりを思い出していた。

そして、カペラはペテルギウスに声をかけようど………

狂人とクズの本懐

「ペテルギウスアンタは何の為に戦っていやがるんですか？」

唐突なカペラの質問にペテルギウスはゆっくりとカペラの方を向き

ただでさえ大きい瞳を眼球が飛び出そうなほど ギョツ と目を見開き

「なんのため・・・」

なんとため と今言ったデスか？

そんなのサテラへの愛に決まっているのデス。サテラへの愛は絶対なのデス

愛に愛に愛にサテラへの愛に報いなければああああああああ

ペテルギウスの狂氣的な愛の叫びにそばに座っていたシリウスはサテラへの憤怒の情を燃やし、カペラは目を冷ややかに細めて

「ペテルギウス、お前のそれは愛でも何でもない。ただの妄執と依存だ。他の奴の前ではいい。だが愛と色欲を司るこのカペラ・エメラダ・ルグニカの前で二度とその汚い感情を愛だと名乗るな。クズ肉がッ」

カペラが吐き捨てるように言うとペテルギウスの体が痙攣を起し

「あ・ああ・・・」

壁に頭を叩きつけながら

「私の 私の魔女への愛が偽りだと・・・それはありえないのです。怠惰であることは最も唾棄すべき事柄、ゆえに私は勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉に勤勉にこなしてきたあああああああつー！

愛とは勤勉に行動し 勤勉に働き 勤勉に尽くして 心も体も勤勉に尽くしてきた 勤勉にしていたものこそがあああああつー！

得られるのです。証明できるのです。

愛の研究者を自称しながらそんなことも理解できないなんて

あああ アナタ怠惰ですね？」

「はああ」

ペテルギウスのおぞましい心の叫びにカペラはため息をついて自らの体に手をあてて

「ペテルギウス・・・」

カペラの姿が黒龍から銀色の髪をした長い耳が生えているハーフエルフに形を変えた。その姿は400年前に剣聖と龍と賢者シャウラに封印された嫉妬の魔女サテラとうり二つだった。

「ギャハハハハ」

どうですペテルギウス ムラムラきましたか？この姿に

押し倒してえと思っただのかよ？やりてえと思っただのかよ？欲情したか？勃起したか？

もししてねえならためえのそれは愛でもなんでもねえただの勘違いだよ？そのことを理解もせず認めることも出来ない

それが存在自体も中途半端なためえにふさわしいよ。この頭の沸いたクズクズクズクズクズクズクズクズクズ肉があつー」

ペテルギウスはカペラの遠慮などという言葉が一切入る余地のな

い言葉の暴力に、5本の指を生暖かい口の中に全部突っ込んで噛み潰した。

指からは大量の血液が滴り落ち、指からは白い骨のようなものが見えていた。

ペテルギウスは特に傷を気にした様子もなく、痛みに顔を歪ませることもなく、全部の指を噛み潰すと壊れた人形のように震え、

「・・・さないのデス。

サテラを冒読することはあああああつ！
誰にも許さないのデス。

ここまで・・・

ここまで本気で殺したいと思ったのはエキドナ以来初めてなのデス。

コロシテヤル」

ペテルギウスの言葉にカペラは再び自分の体に手を当て白髪の水
エキドナに変化し、凶悪な笑みを浮かべ、

「きあがれってんですよ ペテルギウス

凶星をつかれ、顔真っ赤にしてる童貞なんて気色悪い ワタクシが
その無駄な命終わらせてあげますよ」

「見えざる手え！」

「ギャハハハ」

「パンドラ様 アレ止めなくていいの？」

怠惰と色欲の激突を眺めていたパンドラにレグルスが特に気にした様子もなく話しかけた。レグルスの発言にパンドラは意外に思ったのか

「あら？レグルス もしかして仲間を心配しているの？」

パンドラの発言にレグルスは顔をしかめ、

「まさか、奴らがどうなろうとしたことじゃないよ。僕が動くのは顔が可愛い花嫁を見つけたときと僕の権利を侵害した時だけさ。無欲で安定した生活を求めているからこそ僕にこの権能がついたのだと思うよ。人は自分の器以上のことをしようとするからこそ危機に立たされ、最悪の場合は命を無駄に落とす。僕のように無欲で自らの

器を理解しているからこそ僕は生まれてこのかた危機というものを味わったことがない。当然だよ。この権能があれば剣聖だろうと龍だろうと僕に勝つことは不可能。無欲で安定した生活を求めている僕はそんなことをしようとは思わないけどこの権能があれば世界征服だってできるよ。

・
・
・

そうじゃなくてパンドラ様は戦力低下が嫌でこの会議を開いたんでしょ？止めなくていいの？別に愚図のペテルギウスが死のうと淫売女が死のうと僕の知ったことじゃないけどこの会議に僕を呼んだ以上きちんとしてもらわないと僕の質が疑われちゃうだろう？

もし力がないっていうなら力を貸してあげるよ。君には花嫁を何人か見つけてもらった借りがあるしね。小さな借り1つ返せない小さい男だと思われるのも僕の心が傷ついて殺してしまうかもしれない。やっぱりどんな人間だって懸命に生きているんだ。だから僕もその命を絶つことはしたくないからね。」

レグルスの矛盾だらけの自己中心的で身勝手な弁舌にパンドラは特に表情を変化させることなく

「カペラの方に殺意はないですね。まあ見ていればわかりますよ。」

と意味深に答えるのみであった。

パンドラの言葉にレグルスは鼻を鳴らし、怠惰と色欲の方に視線を向けた。

怠惰は自傷行為をした頭と指以外はほぼ無傷であり、
色欲は手が一本抜けていて体のいたるところに木刀で殴られた
ような打撲痕があった。

「カペラ 私の愛が偽りだというあの言葉を撤回してもらいたいので
ス。

そうすればアナタの怠惰を許し、水に流すのデス。あなたも私と同
じ魔女教徒。

魔女の信愛、寵愛、敬愛、純愛に、愛に愛に愛に愛によってえ
らばれたもの。愛に、愛に報いなければああああっ！」

ペテルギウスの否 狂人の甘言にカペラはペテルギウスに負けず
劣らずの凶悪な笑みを浮かべ

「ワタクシは何もまちがったことはいってねえです。お断りですね。
この短小の童貞やろうがつ！」

「つつつつ 死ねええええ 見えざる手えええええつ！」

カペラの挑発に対し、ペテルギウスは本気でカペラを殺そうと思
い、頭と胴体をバラバラにする気で見えざる手を発動した。

見えざる手がカペラに当たる瞬間シリウスがカペラの前に立った。
ペテルギウスは見えざる手の速度を緩め、シリウスに当たる瞬間に止
まり、見えざる手を消した。

「シリウス なんのつもりデスか？」

シリウスを睨みつけながらペテルギウスはやや棘のある声で言葉
を発した。

「すいません アナタ しかし気持ちがすれ違ってしまうのは悲し
いものです。やはり愛とは人と人とが気持ちを共有することで育ま
れるものだと思えます。ですからカペラさん、ペテルギウス す
いません。これは私の自己満足です 許してください

憤怒の権能 カペラ ペテルギウスの感情を共有」

「あああああああ………」

カペラ・エメラダ・ルグニカはペテルギウスの魔女への愛 愛に報
いるために全てを捧げる感覚を味わい、

ペテルギウス・ロマネコンティはカペラの愛の実験の内容 愛は性
欲だということ嫌というほど見せられた。

1分という短い時間ではあったがペテルギウス・ロマネコンティと
カペラ・エメラダ・ルグニカはお互いの愛について感じる感覚を共有
していた。

確かにこれだけ愛の実験の結果を見せられては愛は性欲が絡んでいるということも少しは認めなければならぬのデス。
しかし・・・

まさか性欲なしであそこまで行動できるやつがいるなんて愛は性欲以外にも一応形はないこともないってことですかね？
でも・・・

「あなたのことが好きになれそうにないデス」
「ワタクシはアンタのことが大嫌いです」

ペテルギウスとカペラの和解、否お互いが分かり合えないということに関する和解が成立した時にペテルギウスにギュツと抱きついていた憤怒の主がそこにいた。

「シリウ・・・」

「好きです。ペテルギウス」

ペテルギウスが言葉を発する前にシリウスが告白した。

空腹の逢瀬

「好きです。ペテルギウス」

「シリウス・・・それはどうい・・・」

「あなたのそういう一途にして一生懸命なところが好きです。」

一人の人間として」

シリウスは顔を赤らめてそう早口で告げた。

ペテルギウスに好意があることは伝えたからこれは立派な告白です。

うう・・・一応告白はしたけど恥ずかしくてしばらくペテルギウスに合うのは難しそうです。とりあえず告白はしたのでカペラさんにとや顔してそのあとで頭を下げた。

「ありがとうカペラさん アナタがペテルギウスの心の中に踏み込んでくれたから私はこうして告白することが出来ました。」

でも恥ずかしいのもう出ていきますね／＼」

カペラに近づいて小声で早口でそう告げると
シリウスはパンドラへ別れの挨拶を告げささつと出ていきました。

シリウスが出ていくときにペテルギウスは声をかけた

「待つのです シリウス」

ペテルギウスはシリウスから告白？的なものを受けてからずつと
下を向いて考えていた。

「魔女の寵愛を得るために、魔女の愛を、愛を愛を愛を愛を愛を得
るために魔女の復活に尽力してきたのです。」

魔女の愛以外はいらない、魔女の愛さえあればそれでいい。

そう思ってきたのです……」

ペテルギウスの発言を聞いてシリウスは表情に影を落とし、下を向
いて体を震わせていた。

魔女への憤怒で

「魔女以外の他人の好意、愛など気持ち悪いだけそんなの要らない……

そう思っていたのデス。ですがシリウスアナタの好意は向けられ
ても嫌ではなかったのデス。

魔女教大罪司教のなかでは一番好きかもしれないのデス シリウ
ス。」

ペテルギウスの言葉でリングのように赤かった顔を色素がなくな
るのではないかと思わせるほど紅色し、

「また今度会いましょうっペテルギウス／＼」

と早口で告げ、砂漠の中を猛スピードで走り抜けていった。

シリウスとペテルギウスの一連のやりとりを見ていたカペラは「は
あああ」とため息を吐き

どうせならここで押し倒して子作りしろってーんですよ。

大罪司教同士のまぐわいや精霊の性交、欲情のポイントなどを観察したかったんですがね・・・

まあシリウスという自由に使える駒を手に入れただけで良しとしますか。

それにしても魔女への偏愛しか示さなかったペテルギウスがあとこまで好意を示すなんてこれはひよつとしたらひよつとするかもしれねえーですね。

まあ何にしてもどんな結果になったとしてもワタクシの愛についての理解が深まればそれでよしです。

一方告白まがいのことをされたペテルギウスはシリウスが出ていった直後から思考を張り巡らせ続けていた。

シリウスの告白と世間一般でいわれるものに当たるのかは不明だが好意があるということだけはわかったのデス。

全体が真っ黒で薄気味悪いオーラを放っている福音書に赤い文字で

そう記されていた。

それを見た瞬間ペテルギウスは頭を机に激しくぶつけながら自らの行いを後悔した。

何も考えず何も行動しないのは怠惰であり、考えることは勤勉なことですが、考え過ぎて動けなくなり、何もしないのは結局怠惰なのデス。怠惰は悪、怠惰は極悪の極みなのデス。怠惰たるものに愛は訪れないのデス。魔女よ、どうか、どうか怠惰なるこのワタクシをお許してください。勤勉に勤勉に努めなければ

シリウス 福音書に文字が記されたのでこの通りにしないといけなくなつたのデス。福音書は魔女への愛は絶対、絶対なのデス。

この王選の半魔への試練が終わつたらシリウスと語り合ふのデス。分からないことをわからないままにしておくのは怠惰の極みなのデス。私は全てに勤勉に、そう勤勉にしなければ……

ペテルギウスはパンドラに試練を遂行するために会談を抜ける旨を伝えて出ていった。

最も会談の体をなしていたのかは不明であるが……

告白まがいのことが終わり、走って出ていったシリウスは夜の星を見ながらペテルギウスの言葉を脳内に反芻していた。

「大罪司教の中で一番君のことが好きだ。シリウス

結婚しよう。しかしサテラが復活するまで式を開くことが出来ない。だから魔女復活まで結婚は待つてほしい・・・」

はいペテルギウス私も待っています／＼

少し、いやかなり記憶が改ざんされていた・・・

シリウスが星と黄昏ながら回想に、いや妄想にふけつているときに後ろから気配を感じ、振り向くとそこには凶悪な笑みを浮かべた、子ども否魔女教大罪司教暴食担当ライ・バテンカイトスその人が立っていた。

その容姿は小さく童女を思わせるような体格だったが、顔は凶悪犯のような笑みを浮かべており、体格と顔がミスマッチし、ちぐはぐな気持ち悪さを醸し出していた。

その瞳はまるで子どもが甘い、甘い大好物のチョコレートを見るようなそんな目をシリウスに向けていた。

シリウスはライ・バテンカイトスを見た瞬間顔を歪め、

「何か用ですか？ライ

今愛しのペテルギウスの思い出を反芻しているので早くしろよ」

は
シリウスの邪険に扱うような態度に特に気にした様子もなくライ

「僕だって好きで話しかけた訳じゃないし、パンドラ様とカペラに頼まれて君に対話鏡を届けに来ただけだし・・・

そもそも君がペテルギウスを好きなんだという話には興味がないよ。

そんなことを考えても、誰かを好きになっても、愛情も友情も恋も愛もなんもかんもすべて食べ物をおいしくするスパイスさ。」

ライの発言にシリウスは

「愛の何たるかもわからない糞餓鬼がつ！そんなに食欲を満たしたい

なら土でも食ってろぼけがっ！」

シリウスの吐いて捨てるような言い草にライは怒るでもなく悲しむでもなく、ただ次の食事はどうしようかと、次の食事はシリウスの言っていた愛し合っている人を両方いつぺんに食べたら美食になるのかななどと考えていた。

「シリウス 説教は俺たちは嫌いだし僕たちも嫌いだ。君の愛の価値観を否定する気もないし、かといって興味もない。俺たちの価値観をわかっているのは僕たちだけでいいああこの飢餓を満たしてくれる人間（食べ物）はないものか。ああ空腹は最高のスパイスという言葉があるけど常に空腹な僕らは常に最高の気分であらば俺らは食事をしていくことになるんだろうね。」

あまりの空腹で悪食のロイは土を食べたらしいけど美食家の僕はそんな気にならない。そもそも食べ物は有限なんだし美食にありつける可能性も有限。そんな中でおいしいと感じないものを食欲の為にただただ暴食するなんてもつたいないじゃないか！暴食も暴食も限られてるんだよ！その限られた中でおいしいものを食べない美食しないなんて損した気分になるじゃないか！」

そんな暴食まみれのライの意見を聞いてシリウスはペテルギウスの記憶の反芻（改ざん）をやめ、憎悪のこもった目をライに向け

「ライ・バテンカイトス私はあなたのことが個人的に大嫌いです。ペテルギウスは暴飲暴食にしか興味の無いあなたのことを特に何も思っていないみたいですが私は嫌悪します。あなたのその食物を見る目を、あなたの暴食の権能を・・・」

愛とは気持ち共感すること。共感せずして愛は語れない。共感とは1人では決してできない。誰かがいないと。ですがあなたの権能は人物の記憶、そこにいたという痕跡全てを消す。そして何よりあなたの権能は大罪司教にも影響を及ぼす。もしあなたが暴食の権能でペテルギウスの痕跡を消そうと思えば出来ないこともないでしょう。

そう考えたときに私は恐怖と憤怒であなたへの殺意を抑えきれそうにないです。私のあの人を引き離そうとするなんて・・・ああ憤怒憤怒憤怒憤怒おおおお！

もしい 私からあ ペテルギウスをお 引き離すものならあ 殺してやるぞお ライイ」

シリウスの怨念がこもったような声を聞いて普通の人なら卒倒しそうになるところだが彼も異常の集団魔女教大罪司教の1人 特に臆する様子もなく

「僕らは食べることに、満腹感を得られることにしか興味がない。悪食のロイの方は知らないけど大罪司教同士の愛だの憎悪だのに興味はない。でもロイの方が大罪司教を食べたいと言っていたから。うちようどいいや パンドラ様の話では大罪司教の誰かが欠けるんでは。だからさシリウスもしペテルギウスが死んで死体回収出来たらその死体ちようだいよ！」

「勤勉なあの人が早々死ぬわけじゃないですか

それにもし仮に死んだとしてもあなたたちなんか死体を渡すわけありません。死体も愛も永遠に私の物です。むしろ死体なら私から離れられない フフフフフ…」

・・・

「とりあえず僕たちは対話鏡を渡し、俺たちは約束を果たした。
だからもう行くね」

ライの言葉に特に何も返さずシリウスもライと反対側の方へ歩いていった。

「さてこれでカペラの愛の実験で最も愛が深かったペアを食べられる。シリウスの話を聞いていたら僕たちも愛を食べたくなってきちゃった。これが俺たちの食への愛なのかな？まあいいや」

「それではイタダキマス」